

医療活動や衛生・健康教育の歴史から 見えてくるもの

-郷土資料を教材とした健康教育の可能性を探る-

関 和美

亀田総合病院図書室

1. 調査の経緯

今まで、自分の住んでいる千葉県安房地域にて、郷土資料を用いながら明治期以降の医療活動や衛生・健康教育、図書館・文化活動について調査をしてきた。その過程で、現在行われている医療活動や健康教育に通じるような点や、現在図書館が担っている役割に重なる点が見受けられた。

調査中に 1968 年の広報たてやまに「破傷風物語」・「破傷風予防接種」の記載があることを発見した。「破傷風物語」には「本市（千葉県館山市）にゆかりのある南総里見八犬伝」「犬塚信乃が破傷風にかかり、九死に一生を得た」との記載があった。

郷土に縁のある物語『南総里見八犬伝』と「予防接種案内」を絡めた健康教育が行われていたことに触れ、なぜこのような健康教育が行われたのか知りたいと思った。また、過去の取り組みを知ることにより、現代でも、郷土資料を教材とした健康教育が出来ないかと考えた。

2. 調査の経緯と方法

2.1 広報たてやま「破傷風物語」と「破傷風予防接種」を読み解く

2.2 『南総里見八犬伝』と「破傷風」

2.3 もう一つの「破傷風ものがたり」を読み解く

2.4 「破傷風物語」の背景から、健康教育の可能性を探る

3. 調査結果と考察

今回の調査の中では、『南総里見八犬伝』を用いた健康教育の背景や目的の推察まではできたものの、その効果について突き止めることは出来なかった。

破傷風というのは現代もある病気である。今後、調査内容をもとにした健康教育が、何らかのかたちで実現可能なのではないかという可能性を感じている。また、調査過程で、郷土資料の専門家である館山市立博物館学芸員および館山市図書館司書の知恵をお借りした。健康教育を実施する際も、地域の専門家に知恵を借りることで、より市民に関心を持ってもらえるような健康教育や情報提供ができるのではないかと考えている。